

## 獨逸浪漫主義の諸問題（一）

小牧, 健夫

<https://doi.org/10.15017/2556574>

---

出版情報：文學研究. 30, pp.65-80, 1941-12-25. 九州文學會  
バージョン：  
権利関係：

# 獨逸浪漫主義の諸問題 (一)

小 牧 健 夫

## (一) 初期浪漫主義に於ける自然詩 (Naturpoesie) の概念について

自然詩 (Naturpoesie) の語は初期浪漫派の述作中に屢々見出されるのであるが、必しもそれは一義的でなく、フリードリヒ・シュレーゲルやノヴァーリスの言表にも往々異なつた意義に用ひられてゐるのを見る。その上この概念を明確に規定してゐる場合がない。ただ F. シュレーゲルの『文藝對話』に比較的詳しく、これについての解釋が見られるのであるから、今これを手がかりとして「自然詩」がいかに浪漫主義の文學論に於て理解されてゐたか、またそこでいかなる位置を與へられてゐるかを明かにして行かうと思ふ。

フリードリヒ・シュレーゲルの『文藝對話』(“Gespräch über die Poesie”) は一八〇〇年『アテネウム』誌上に掲載されたものであるが、浪漫主義の文學論を窺ふのに最上の資料として、研究家の肝膽を碎く検討の對象となつてゐる。この作品は四篇の纏まつた小論文を中に含んで、數名の人物が活潑に文學に就いて意

見を應酬することになつてゐて、論文といふのも實は座中の一人が朗讀したやうに扱はれてゐる。ここに登場する人物の Andrea が F. シュレーゲルであり、Ludovico がシェリングであり、Antonio がシラライエルマッヘルであるとの説はこの場合深く穿鑿する要はないであらう。

この論文が『文學の諸時代』、『神話論』、『小説に就いての書簡』、『ゲーテの初期、後期の作品に於ける様式の種々相に關する試論』の四篇であることは周知の通りである。ところで、一般にはこの論文となつてゐる部分のみが重要視されて、粹をなしてゐる會話の部分は比較的閑却されてゐるが、そこにも著者の文藝に關する見解が片言の裡に、見落せない重さをもつて、示されてゐるのである。ここに扱はうとする自然詩 (Naturpoesie) については、緒言に當る箇所に注目すべき發言をしてゐるのである。

これを讀んで第一に吾々が識り得ることは、ここに言はれる「自然詩」の場合の詩 (Poesie) は制作された詩藝術 (Dichtung, Gedicht) とは殊別さるべき概念であるといふことである。従つてまた、この自然詩は後にいふ自然詩 (Naturdichtung) と混同してはならない。この兩者の意味の差異を明かにすることが、既にシュレーゲルの Naturpoesie のいかなるものであるかを半ば以上解明すると言つてよいくらゐるのである。

F. シュレーゲルは上述の對話篇冒頭の部分に次のやうな言葉を語つてゐる。

「これらのもの (詩の形態を具へ、詩と呼ばれるもの) は、草木のうちに動き、光として輝き、子供にあつて微笑し、青春の盛りに閃めき、戀する女の胸に燃える、形なき、意識なき Poesie に比すれば何物でもない。しかしこのもの (形なき、意識なき Poesie)こそ太初の、根源的な詩であつて、これなくしては、言語の詩は決して生じなかつた

であらう。」

ここで自然詩を言語藝術である詩と區別してゐることは明白である。普通に詩と呼ばれるものは、言語を要素として形成された一の形成物であるが、シュレーゲルは形なき Poesie と言つてゐる。それは詩人の構想作用とか表現活動とかにかかはるところのない「草木のうちに動き」、「子供に於てほほるむ」ものなのである。それは無盡藏に世界に遍ねく行きわたつてゐるものであり、吾々をはなれて存在するものである。

この自然詩の普通の詩との關係はそれではどうなるであらうか。それを見る前に先づ前述の Naturdichtung との區別を明かにしておかなくてはならぬ。

Naturdichtung の概念は主としてヘルデルによつて、充實した、勝義の内容を有つに至つたもので、彼によつて烈しく排斥された Kulturdichtung の概念に對置されてゐる。周知のごとくヘルデルは古代民族に傳承された傳説、民間に残る古き歌謡の價値を闡明して、獨逸の文藝思想史に劃期的な業績を残したのであるが、彼の自然文學尊重の主張は簡約すれば次のごとくである。

Naturpoesie は普通は Naturdichtung と同義に用ひられる。(Ggs. Kunstpoesie.) (グリンの辭書<sup>2)</sup> ) ところで便宜上コルフ (Korff: Geist der Goethezeit) のやうに、兩者を異なる意味を有たせて使用した。

因みにゲーテの『ゴルヘルム・マイステル』について F. シュレーゲルとノヴリスとの評言のいづれにもともに「自然詩」の語が見えてゐる。シュレーゲルは「ミニヨン、シュペラータ、アウグスチーノイ等は『マイステル』中の自然詩の神聖な一族で、全體に浪漫的な魅力と音楽を與へてゐる」(ゲーテのマイステル<sup>3)</sup> ) と言ひ

ノヴーリスは「この書のうちには浪漫的なもの、また自然詩も、不可思議なものも失はれてゐる」(『斷章』)と言つてゐる。シュレーゲルのこの場合は、本来の、『文藝對話』に於ける意味を有つと解すべきであるが、ノヴーリスのこの場合の自然詩は狹義に、自然描寫の美といふほどの意に解してよいと思はれる。他のところで彼が『マイステル』に外界の敘述、敘景の文の乏しいことを難じてゐることからも、さう見るのが妥當であらう。しかしノヴーリスが別の箇所で、戦争を詩の作用であると言ひ、(『オフテルデイ』)愛を最高の自然詩であると言つてゐるのは(『同上』)またシュレーゲルの謂ふ自然詩の意味に従つてゐるのである。

ヘルデルによれば、人間でいへば小兒、民族でいへば自然民族は逞しい想像を自由に働かせ、純粹な感情の言語、即ち詩を語つてゐる。民謡はかかる素朴な、未だ合理化されない根源的感情の地盤から生れたといふことによつて價値があるのである。それには専門的、職業的詩人が書齋で腦漿を絞つて拵へ上げた文化詩(Kulturdichtung)には見られない眞實感がある。いはば自然がそこで歌つてゐるのである。「一民族が未開で素朴であればあるほど、その歌謠も素朴であり、即ち一層生氣に富み、自由で、感性的で、抒情的で、行動的である筈である。」それは「紙のために作られた死んだ文字の詩」でなく、直接な感情の流露する生きた詩である。ヘルデルのこの見解を端的に會得するために、吾邦の萬葉の歌と後代の題詠歌とを對照してみるのもよいが、また今も現に漁村山里に残る古來の民謡(例へば多くのすぐれたものを含む八重山群島の民謡のごとき)と何々小唄、何々主題歌と稱せられる當代の流行歌謠とを比較してみるのが捷徑であらう。前者には感情體驗の直接性と力強さが溢れてゐるのに對して、後者には最上の場合精々氣の利いた技巧の牙えを感じしめるにすぎない。それには感傷はあつても、決して情熱に高まつて來

ない煽情の饒舌があるのみである。

ヘルデルは従来多く顧みられなかつた民謡の缺陷と見なされたその無技巧、素樸、單純の諸性質を却てその長所として強調し、文藝思想に價値轉換を行つて青年ゲーテその他に甚深の影響を與へた。そこに彼の先驅者としての大きな成績が認められるのである。

一たい *Naturdichtung* の思想を文學論に重要な契機としてとり入れた最初の人はヘルデルであると見てよいであらう。(ハーマンの精神がこの思想の成熟に酵母として作用してゐることは疑はれない) ヘルデルが自然詩をいかに尊重したかは前に述べたが、彼の自然詩の理念を把握するのに最も多くの照明を吾々に與へるものは、『ヘブライ文學の精神について』(『*Vom Geist der ebräischen Poesie*』)であらう。そこには、眞の自然詩を「神の自然の美しき解釋者」と呼んでゐる箇所がある。また自然詩人 (*Naturdichter*) といふ語を用ひ、「神の詩」の語も見え、「神自身が世界創造に於て吾々に表現したものでより美しい詩が存し得るだらうか」とも言つてゐる。時としてシュレゲルの自然詩の概念へ著しい接近を思はせるところのあるのは注目すべきである。

要するに、ヘルデルに従へば、歴史と詩とが未だ分たれない民族の原初状態にあつて、恰も自然現象のごとく自然に生れた傳説、神話が詩の原型であり自然詩なのである。個人の恣意の制作でなく、民族の魂から民族の聲として生れたものである。従つてそれは民間詩 (*Volkspoesie*) と同じものを指してゐる。

ヘルデルのいふ自然詩が曩に述べたシュレーゲルの自然詩と同一概念でないことは、この上の絮説を要せずして明

かであらう。ヘルデルは、この語を彼自身の意味で使用する時、文學的意識をもつて制作された詩に對置し、ともかくも文學の一つの種類として見てゐるのに對し、シュレーゲルの自然詩は文學そのものに對立するものである。或はまた前者の自然詩は詩のうちに自然を見たものであるが、後者の自然詩は自然のうちに詩を見てゐるともいふことができよう。兩者はかく異なつたものであるが、しかもいづれの意味に於ても自然詩を強調する精神態度は、一つの地平に連なり、同じ方向を目差してゐるのである。

自然詩についてシュレーゲルは前掲の部分について次のやうに語りつづける。

「人間である吾々すべては、常に且つ永久に、一切の活動、一切の喜びの對象、素材として、神の一つの作詩以外に何物も有たない。さうして吾々もまたその神の詩の一部であり、その花である。」

ここで自然詩は「神の作詩」と呼ばれ、吾々人間はそれに對して全體に對する部分の關係に立つのである。すなはち、人間の地上の營みも自然詩の一部と見なされるのである。さうして後段の「藝術のあらゆる神聖な所作は、世界の無限の所作シュペル、永久に自己を形成する藝術品の、ただ仄かに似通ふ模寫にすぎない」といふ言葉によつて、神の藝術作品と人間の藝術作品とが比較されてゐる。詩人の作品は到底神の作品と同列に置かるべきものでないが、何等かの點でその根源である神の作品の影を映してゐないものはない。ただそれが原像に近く迫つてゐるか、はるかに隔たつてゐるか、といふ程度に差等があるのである。

かく見て行くと、F・シュレーゲルの自然詩といふものは詩の名を帯びてゐるところに事新しきを感じしめるのであるが、かういふ思想は特殊の考へ方から出てゐるのでなく、神秘主義その他の汎神論的思想傾向に脈絡が見られ、

また、同時代の自然哲學者等の言説に類比を見出すことが出来るのである。現にブルツェルはシュライエルマッヘルの『宗教講話』との類縁を指摘してゐる。(Walzel: Grenzen von Poesie und Unpoesie.)

この類縁を仔細に追究して行くことはこの小論の意圖にとつてさまで重要なことでないから省略する。要するにシュライエルマッヘルが宗教に就いて言つたことをシュレーゲルは藝術に就いて適用してゐると見られるのである。『文藝對話』の緒言は、『宗教講話』の根本見解と吻合して、宗教を詩に置き換へたやうなものであることは、この兩つの作品を照合すればたやすく知られるところである。グンドルフがこの『緒言』に浪漫主義の三根本概念、無限性、個性、協同性が結び付けられてゐると言ひ、この三概念に吾々はシュライエルマッヘルの宗教講話に於て再會すると言ふのもこの類縁に注目してゐるのである。(Gundolf: Romantiker.)

卓越した人材が夥しく輩出して親しく交はり、共に思索し、(Synphilosophieren) 共に偉大なるものを創成したこの歴史上稀有な時代に於て、一人の言ふところが他の言ふところと深い連繫をもつことはむしろ當然である。そこでは何れが受領者であり、何れが贈與者であるかを遠かに決し得られないやうな相互の交流、啓發があつた。ここにシュレーゲルとシュライエルマッヘルの類縁を見るものは、同様にまた前者とシュリングとの思想的近似を認めなければならぬであらう。

シュリングの藝術哲學に於て、Kunstと區別されて用ひられてゐる Poesie の概念は、シュレーゲルの謂ふ Naturpoesie と同じものでなく、それは人間の藝術活動に於ける無意識的、創造的な要素として意識的・技術的な Kunst と對立せしめられるのである。「Poesie は藝術に於て、學ばれ得ないもの、練習やその他の方法によつて獲られないもの、



ただ自然の恩恵によつて天賦のものであり得るものである。Poesie と Kunst と何れが優位を占めるかといふことは無益の間であり、この兩者の何れも他のものなくしては何等の價値がない。この兩つが集まつてのみ最高のものを制作することが出来るのである。」(Schelling: System des transzendentalen Idealismus, VI. Abschnitt.) それ故に、藝術制作とは無關係として考へられるシュレーゲルの Naturpoesie と同じものではあり得ないのである。

しかし更に一層深く立ち入つて考察すれば、この兩つのもは同一のものを指してゐないとしても、また無縁のものといひ得るには、あまりに密接な聯關を有つてゐるのである。

世界の到るところに見られるシュレーゲルの「自然の詩」が「言葉の詩」を成り立たしめる根源と見られ、また藝術の遊び(言葉の詩)は世界の無限の遊び(自然の詩)の模寫と言はれるには、一たいいかなる實際の連鎖がその間に認められてゐるのだらうか。言ひ換へれば、自然詩は藝術詩といかなる媒介によつて結ばれるのであらうか。自然詩がいかに藝術詩に受けとられてその模寫となるのであらうか。この問ひに對する答のうちに詩人の使命が開示されてくるのである。

自然詩は自然の裡に存在するものであるが、それを感得するには特別の器官を要する。この器官の常人よりも發達したものが詩人である。浪漫主義の文藝思想に於て、詩人または天才はかかる器官の使用者として尊重される。ゾーリスがいふやうに、「自然器官(Naturorgan)を有しないものは、自然を捕捉することが出来ない。」自然はふんだんに、惜しむことなく「詩」をあらゆるものの上に瀾漫せしめてゐる。これを「詩」として受容するのは詩人の感覺である。自然詩の現象が單なる自然現象でなく詩であるためには、詩人のうちにこれに感應するものがなくては

ならぬ。或はむしろ自然詩を詩たらしめる働きがなくてはならぬ。しかるに或物はそれと等質のものを有つときのみ完全に把握され得るのであるから、自然詩を捉へる詩人のこの働きはまた詩の働きでなければならぬ。「眼が太陽のやうでなければ、吾々はどうして太陽を見ることができよう」(ゲーテ)この働きの詩人の側にあつて、延いて作品のうち揺曳するものがシェリングの謂ふ *Poesie* であるとする見ることが出来る。シュレーゲルが「あらゆる制作品のうちには目に見えぬ精神がある。それが *Poesie* である」と言ふのも、制作に於て技術の外にかかる *Poesie* を認めてゐるのである。ここにシュレーゲルのいふ *Poesie* と、シェリングのいふ *Poesie* との接觸面がある。さらにシェリングがまた「吾々が自然と呼ぶものは不可思議な秘密の書物のうちに隠れてゐる一篇の詩である」と言ふのも、單なる譬喩を越えて、自然を神的な藝術作品と觀てゐるのである。シュレーゲルの「神の詩」と謂ふのと一般である。しかしこの場合にも發表の時の先後によつて一方的の影響を推斷する誤を犯してはならない。シェリングの「先驗的觀念論の體系」の完成されたのは『文藝對話』の後の事に屬するが、シェリングは既に『對話』以前にシュレーゲル等と交遊し、彼の精神の力は強く周圍に影響を與へ、「山間に俄に強くむし暑く吹き起る南風のやうに浪漫派のうちへ働いた」(Ricarda Huch)のである。彼等はむしろ『對話』に描かれてゐる一群のごとく、互に切磋し、啓發し合ひ、各の人が「先生であると同時に弟子であつた」と見なければならぬだらう。

ブルツェルが『對話』のシュレーゲルの思想にシェリングよりもシュライエルマッヘルとの共通を重視してゐることはよいとしても、自然の無意識な詩を認めてゐることはシェリング的でないといふ意味のことを言つてゐるのは不可解である。

以上、F・シュレーゲルの『文藝對話』の『緒言』に書かれた「自然詩」の概念を説き、それとヘルデル、シュライエルマッヘル、シェリングとの聯關を見たのであるが、この人々はその精神にひとしく浪漫主義的傾向を有ち、相通する文藝思想を懷抱してゐたことはいふまでもない。この文藝思想を全般に互つて精しく述べるいとまはないが、上述の詩人の使命に就いて今少しく立ち入つて解説を加へ、浪漫家によつて力説される「天才」の問題を考へてみたい。

曩にいふヘルデルの自然詩、或はまた民謡の尊重は、當然文化の歴史の發達には、頽廢的な現象が隨伴して起るといふ考を前提としてゐる。この思想は一見文化悲觀説のごとき觀を呈するが、しかしヘルデルは文化の前途に絶望してゐたのでない。彼の言語年齢説に於ても知られるやうに、老い行く文化に若々しい活力を與へて回春を圖ることの可能を信じてゐた。さうして文化の衰退は、自然を離れることによつて、その根源から背くことによつて、現はれてくるのであるから、更新の途は再び自然を取戻し、根源に復歸することを通じて行はるべきであるとした。文學の領域にあつて、自然詩、民謡を提唱することは、失はれたものへの空しき哀惜ではなく、生氣の萎靡を來した獨逸の國民文學に回生の活を入れる警醒であつたのである。

この文學の甦生がいかにして爲されるか。失はれた自然性を再び與へて文學に新生命を注入することは何によつて可能であるか。天才がこれを能くする。ここに天才が重い任務を荷つて登場してくる。さうしてシェイクスピアこそかかる天才の範例として感激を以て迎へられたのであつた。

ヘルデルは、ハーマンの天才説に於て天才の要素として掲げられた自然的な原本性を重視した。彼がシェイクスピアに讚美したものは何よりもその自然の眞實に迫る力であつた。「シェイクスピアは最も偉大な巨匠である。それは正

に彼がただ、さうして常に、自然の僕しもべであるからである」と言つてゐる。ハーマン、ヘルデルの思想に支配的な感化を負うた青年ゲーテもまたシェイクスピアに傾倒し「私が讀んだ彼の作の第一頁は一生涯私を彼の擒とした。さうして最初の劇を讀了したとき、生來の盲人が奇蹟の手によつて或刹那に視力を與へられたやうに立つてゐた」と感嘆の情を披瀝したが、彼も「私は叫ぶ、自然！自然！シェイクスピアの人間のやうにそれほど自然であるものはない」と言つてゐる。「余の今日あるは君のおかけである」といふ彼の感謝は少くとも初期にあつては主としてシェイクスピアの因襲を打破した無比の獨創性、エレメンタリ根元的な情熱の溢れる自然性にかかつてゐたことは疑を容れない。すなはちゲーテもまたシェイクスピアの「疾風怒濤」的・ハーマン、ヘルデル的把握の圏内にあつた。この場合天才の讚美が何よりもその自然性に向けられたことを認めなければならないのである。

一七七〇年代の若き世代の文學革新の運動はかく天才の理念を新鮮な意味を盛つて導入した。たとへその反面には濁つた誤れる天才心酔（シェリングのいふ天才について消極面をのみ認める天才感激）が無拘束な放縱と結びつけられて少からぬ禍をも文學にもたらしたとはいへ、この天才の理念は後に本來の浪漫主義の文藝思想にも重要な契機として受けつがれ、豊かな實りを見ることになつたのである。

初期浪漫主義に於て生産的な想像力が世界原理に高められてゐることはノヴァーリスの魔術的觀念論の魔術マジックの思想によつても知られることである。この魔術マジックのはたらきは藝術的天才に於て典型的に示される。しかしそれは天才の獨占する特權ではない。いかなる人もこの魔術の力を内に潜めてゐないものはないのであるが、天才にあつてそれが現勢的にはたらくのである。天才とはこの力を意識的に自由にはたらかせる能力に外ならない。ノヴァーリスが「天才性な

くしては吾々すべては一般に存在しない。天才は一切の事に必要である。しかし普通天才と呼ばれるものは、天才の天才である」と言ふのは、この事を指してゐるのである。この天才觀は決して天才を凡庸の世界に引下げるのではなく、むしろ天才を異常な、變態のものと思ふことによつて、却つてその威嚴と品位を高めるものである。浪漫主義の知性は「疾風怒濤」が天才に捧げた酒神頌歌ディオニソスの代りに、このやうな天才の論理を提示してその意義を高唱しようとした。浪漫主義は天才をかく見ることによつて天才を吾々の問題たらしめたのである。

布伦ターノの心理學上から觀た天才の考察は、天才と凡才との本質的な差別を認めず、天才の創造、天才の思惟が我等のそれと本質を同じくしてゐることを説いた。さうしてこれを知ることが却つて吾々の天才に對する感激を高める所以であると言つてゐる。(Franz Brentano: Das Genie.)

F・シュレーゲルのいふ自然詩と普通に詩と呼ばれる藝術作品とはかくして自然詩のすぐれた把握者としての天才によつて媒介されることになる。すなはち、自然詩が天才(詩人)の高度の感受力に受容され、意識的な技巧を経て藝術詩となる。この場合自然は藝術の素材といふよりも、むしろ藝術を成立たしめる根源と見られてゐるのである。しかし自然の詩はそれ自身では詩としての機用を發揮することができず、天才を待つて詩として現象するのであるから、天才の意義は極めて高いものと言はなくてはならぬ。それはただ普通にいふ藝術の制作活動に於ける技術的卓越者といふばかりでなく、實に自然の啓示に參與するといふ意味によつて至上の價値を獲得するのである。

しかし天才の理念をその哲學體系にとり入れて、世界原理として最も高い意味を賦與したのはシェリングであつた。かくて天才の制作である「藝術は哲學の唯一の、眞實にして永久の機關オメガであり、哲學が外面的に敘述し得ないもの、

すなはち行爲と生産に於ける無意識的なものと、並びにそれと意識的なものとの根源的同一とを、常に絶えず新たに證明する證券である。藝術は哲學者に至聖のものを示すから、その故に哲學者にとつて最高のものである。そこでは自然と歴史とに分離してゐるもの、生活と行爲に於て、また思惟に於ては永久に身を隠さねばならぬものが、永遠に根本的に結合して、いはば一つの焰として燃えるのである。」(Schelling: System des transzendentalen Idealismus.) さうしてかく無意識的なもの、(Poësie)と意識的なもの、(Kunst)とを綜合した(藝術作品の根本性格は自然と自由の綜合である)完全なものは天才によつてのみ實現されるのであるから、それ故に「天才は美學にとつて、自我が哲學に對すると同じものであつて、すなはち、決して客觀的とならず、しかも凡ゆる客觀的なものの原因である最高の絶對的實在者である。」(同上)とも言はれるのである。シェリングのこの言葉はまたノヴァーリスの「詩は純粹絶對に實在のものである」の言葉に照應を見出してゐる。かくして初期浪漫主義の世界像に於て詩、天才、或はまた生産的な想像力が、中心的な地位を占めるに至つたのである。

かく見るとき、獨逸浪漫主義の本質を詩精神の發揚の面から認めることもできると思ふ。しかしこの場合、詩を狭義にただ美學的にのみ解すべきでないことは、今まで述べたところによつて明かであらう。世界を浪漫化する(Romantisieren)浪漫主義の根本傾向は、宇宙を詩化し、或はまた詩を宇宙化することに外ならないのである。

啓蒙思想には於て詩は作られたものとして效果の方面から見られたが、浪漫主義はこれを天才の想像力の生産として、創造の方面から見てゐることが、その顯著な特色である。さうして想像作用はノヴァーリスによつて世界構成の原理に高められてゐるのであるが、これと平行して彼は愛を世界の一切を結合する原理とし

て強調した。しかも愛を「最高の自然詩」と言つてゐることは深い意義がある。F・シュレーゲルもまた愛の精神を高唱し、「文學に於ける一切の感動の源泉であり、魂であるものは愛である。愛の精神が浪漫的の文學のうちに、到るところに可視的また不可視的に漂はなければならぬ」と言つてゐる。一切を生む愛の宇宙的意義を擧揚する思想にスピノーザの「能産的自然」の思想との聯關をいふものがあるが、直接には先づヘムステルホイスとの脈絡を考へるべきであらう。次にこの關係について若干の考察を試みたいと思ふ。

しかし今ここにこの斷片的考察を結んで次の題目に移る前に、ブッケンローデルに一言をも費すことなく素通りすることは、恐らくここで扱つた問題に對して許しがたい怠慢であるといふべきであらう。

ブッケンローデルはノブーリスよりも短命で、不幸にしてその文學的才能を十分に伸ばし得ないで終つたが、彼の敬虔で、純真な心情はテイクに深い感動を與へ、またテイクを通じて初期浪漫派の同人に微妙な、しかも根ぶかい影響を傳へた。フリードリヒ・シュレーゲルの浪漫主義文學理論の展開には、ヘルデル、ゲーテ、フィヒテ、シュライエルマッヘル、シェリング等の影響乃至協同に待つところ多かつたが、さらにブッケンローデルの作品の薫染に負ふことの大きかつた點も見逃すわけに行かない。彼はテイク、ブッケンローデル合作の『フランツ・シュテルンバルトのさすらひ』をセルヴンテス以後最初の浪漫的な書であると讚美した。浪漫主義の文學論が明かな形をとる以前にブッケンローデルは無意識に浪漫文學を實現してゐたのである。彼の作品に比較すればノブーリスの『オフテルディングン』ははるかに意識的、意圖的な浪漫主義的作品であつた。ブッケンローデルは獨逸浪漫主義の魂であつたといひ得るであらう。

ヴッケンローデルの作品に見られる新しい點は、宗教藝術（例へばラファエロ、フランチェスコ、レオナルド等の宗教畫）の價値を新しき眼で發見し顯揚したこと、同時にまた藝術の宗教としての意義を強調したことであつた。藝術は彼にあつては神聖なものとして崇められ、藝術愛は彼によつて宗教的情熱に高められ、宗教と藝術との合一境が類ひなき敬虔の念をもつて語られてゐるのである。

テークとの合作に成る彼の『藝術を愛する一修道僧の眞情の披瀝』の中の『二つの不可思議な言語とその神秘的な力に就いて』の章に（この部分がテークでなく、ヴッケンローデル）の筆になつてゐることは略ぼ證明されてゐる）次の言葉が見出される。

「しかし私は二つの不可思議な言語を知つてゐる。その言語で神は人間に天上の事物の凡ゆる威力を、（かういふのが僭越でなければ）人間にとつて爲し得る限り、把握し理會することを許されたのである。この二つの言語は、言葉の助けによるとは全く違つた道を通つて吾々の内心に入つてくる。この言葉はいきなり不思議な仕方で吾々の全存在を揺り動かす。さうして吾々の内の凡ての神經とすべての血の滴の中へ押し寄せる。この不可思議な言語の一つを話すのは神だけである。他の一つを話すのは、人間のうちに神が香油で清めて吾が愛兒とした。選ばれた少數の人々にすぎない。私のここに言ふのは自然と藝術とである。」

ここでいはれる藝術とは言語藝術でなく、造形藝術（主として繪畫）であることは、その前後に照らしても明かであるが、しかし同時にこの「不可思議な言語」は、色彩の配合とか、構圖から生れる、吾々の眼に訴へる感覺的要素をいふのではなく、そこに漂ふ超感性的な、吾々の心に染み入るものを指してゐることもまた疑ふ餘地がない。それはシェリングが詩に就いて Kunst と區別した Poesie に該當するものである。従つてまたヴッケンローデルの言



ふところを言語藝術に於ける *Poesie* にそのまま移しても彼の思想の眼目を失却することはないのである。藝術の前に拜跪するこのひたむきの歸依は浪漫主義文學論の汎詩論的傾向と繋がつてゐる。世界の詩化ともいはれる浪漫主義の花々しい思想は、「藝術を愛する一修道僧」の名に隠れた無名の一青年の純潔なつましい魂に、すでに限りなき法悦として體驗されたのであつた。

ヴッケンローデルの作品の根本感情としては、藝術に對する絶對歸依の外に、祖國への回歸、民族意識の覺醒といふべき深い感激が認められる。しかしこれについてはここでは彼の作に示される藝術の古都ニルンベルクの讚美、獨逸中世の畫人アルブレヒト・デューレルへの傾倒を指示することにとどめる。また當時彼とともに考へ、ともに夢み、ともに詩作し、同行の朋として所信を同じくしたテイクがその頃の心境を回想した次の言葉を想ひ起せば十分であらう。

「私にとつて祖國が第一であり、最高であつた。祖國の生活と藝術、それに示される單純で眞摯な態度、それは人々に識られないで嘲笑されてゐるが、これを私は再び擧揚して『シデルンベルト』に於て表現しようとした。」

藝術に於けるこの祖國感情の高揚はクロプシュトック、ヘルデルの遺産であつたが、ヴッケンローデルによつて初めて浪漫的な作品に於て輝かされたのである。この藝術上の獨逸主義の思想は後期浪漫派に至つて豊穠な收穫を見たのであるが、往々にして説かれるやうに、シュレーゲル、ノヴァリス等の初期浪漫派に於てこの系譜の中斷を認むべきではない。これに就いてもまた續篇のうちに言及するつもりである。(二六、一一)